小特集

デジタルシネマ

2. 映画館の現状

2-1 シネマコンプレックスとデジタルシネマ

岡田 裕 介[†]

キーワード：デジタル映像、シネマコンプレックス、映画上映

1. ま え が き

2000年12月9日、株式会社ティ・ジョイはシネマコンプレックス第1号店「T・ジョイ東広島」を広島県東広島市にオープンした。このシネマコンプレックスの特徴のひとつは、衛星配信にも対応したデジタル映像上映設備を常設していることである。

T・ジョイ東広島は、6スクリーンのシネマコンプレックスであるが、そのうちのシアター6が、デジタル常設館となっている。映写機は、デジタルプロジェクション社のDLPシネマ商用初号機を導入した。デジタルモーションプレーヤはキュービス社のキュービット、スクリーンは、ドイツのゲレッツ社製である。これは、フィルム上映ではお馴染みの湾曲したスクリーンではなく、デジタル上映に適したフラットスクリーンとなっている。また、音響は、デジタル上映に対応するために、BOSE社の新たなシステム（BOSEプレミアムシアターサウンドシステム）を全館で導入した。

2. シネマコンプレックスの歩み

1994年から2000年まで、映画館数は7年連続で増加している。映画館数をスクリーン数と言い換えるとわかりやすいかもしれないが、この増加は、シネマコンプレックスの増加が原因と言ってもよいであろう。これを図1と図2に示す¹⁾。図1は日本国内の映画館の数とシネマコンプレックスのスクリーン数、図2は総スクリーンに占めるシネマコンプレックスの割合である。

かつて、アメリカで誕生したシネマコンプレックスという劇場の形態は、1つの施設の中に複数のスクリーンを擁し映画選択の幅を広げたその利便性と、アメリカナイズされたスタイルにより、1993年の外資系シネマコンプレックス会社のオープンを皮切りに、日本でも急速に普及した。しかし、一方ではスクリーン数の増加が、映画鑑賞人口の増加に結びついていないという現実もあり、むやみなシネマコンプレックスの建設に危険性があることも事実であ

図1 日本での映画館とシネマコンプレックスのスクリーンの数

図2 シネマコンプレックスの施設数とスクリーン全体に占める割合

図3 映画館への年間入場者数と興行収入

る。日本における1年間の映画館への入場者数と興行収入を図3に示す¹⁾。

3. 映画上映の仕組み

今回のシネマコンプレックス進出にあたり、設備投資が割高とされるデジタルシネマ上映設備導入に踏み切るに至った理由を説明する前に、映画の上映にいたる仕組みを

[†]株式会社ティ・ジョイ"Present Conditions of Cinema Theaters; Cinema Complex and Digital Cinema"
by Yusuke Okada (T Joy, Ltd., Tokyo)

簡単に説明する。

製作：文字通り映画を製作する段階にあたり、企画し、資金調達し、実際に撮影すること。生産部門と言っても良いかもしれない。

配給：製作された映画を、映画館で上映するまでの過程を担う流通部門である。

興行：実際に映画館で映画を上映すること。実際に観客に映画を提供することからも、小売部門と言える。

この3部門は、それぞれ全く異なる企業で分担される場合もあるし、また、1つの企業がすべての役割を果たす場合もある。

4. デジタル化へ向けて

映画のデジタル化のメリットについて、製作におけるデジタル化については他にもいろいろと論じられていると思われるので、配給面、興行面でのメリットについて説明する。

配給面での大きなメリットは、やはりフィルムが不要になるということである。配給するためのフィルムの焼き増し費、輸送費、保管費、廃棄費、このような費用が大幅に軽減される可能性がある。しかしながらこれらのメリットは、ある程度の上映館が増えてこない限り生かされてこない。

すでにティ・ジョイでは一部その恩恵を受けているが、興行面のメリットとしては、映写に必要とするスペースの削減、そしてフィルムを物理的にあつかうことがなくなることによる、映写に伴う人件費の削減があげられる。また、フィルムと違って、映写を繰り返すことで画質が劣化することもないため、一定レベルの画質を維持することができる。

現状では、デジタル上映館の建設設備コストは、フィルム上映館のそれを2割ほど上回るが、ティ・ジョイとしては、将来のシネマコンプレックスビジネスを見据えて、今後の開発においても、1つのシネマコンプレックスに最低1館のデジタル上映設備を設けていく。また、ほかのシネマコンプレックス会社においても導入の動きがあり、従来のフィルム上映に対する優位性は自ずと確立されていくに違いない。

デジタル映像とフィルム映像の質感の違いについては意見の分かれるところではあるが、実際には、T・ジョイ東広島ではオープニングにCG作品の「ダイナソー」を上映したこともあり、観客からは好評価をうけている。今後デジタルの良さの生きる作品、そして映画に限らず、スポーツ、音楽ライブの上映等、あらゆる可能性を追求しつつ、デジタルの良さをアピールしていきたい。

(2001年5月23日受付)

〔文 献〕

- 1) 電通、「情報メディア白書2001年版」

おかだ ゆうすけ
岡田 裕介 1973年、慶応大学商学部卒業。1970年、東宝映画「赤頭巾ちゃん気をつけて」にて俳優として映画デビュー。以降、「初めての旅」他10本に主演。1974年、ATG映画「呐喊（とっかん）」にてプロデューサーとして参加。以降、テレビ「人間の証明」他多数手がけ、映画としては「動乱」「空海」「天国の駅」等フリープロデューサーとして約15年活躍。1988年、東映（株）に入社。1992年、同社取締役東京撮影所長兼プロデューサーとして「さけ、わだつみの声」「北京原人」等を製作。1998年、映画営業部門担当取締役、2000年、常務取締役就任。同年8月、シネコンプレックス企画・運営会社（株）ティ・ジョイを設立、取締役社長。現在、東映創立50周年記念作品「千年の恋 ひかる源氏物語」を制作中。